

ラッキョウ

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作型	<div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; width: 100px; height: 20px; margin-left: 100px;"></div> ◎ — ◎ </div>											
主な作業		追肥	中耕 土入れ		収穫			植えつけ		追肥	追肥	

ラッキョウ ユリ科、原産地：中国東部

作物名 ラッキョウ

学名 Allium chinense G. Don

作型 ラッキョウ

在来種でいろいろの系統のものが各地で栽培されている。草丈が高く、発育は旺盛だが、分球は6～9個ほどで他の品種より少ない。肥沃地では10g以上の大球になり、花ラッキョウには球が大きすぎるので、分球を多くし小球化させるため2年堀り栽培をする。

技術体系

1 作型の特徴

普通栽培は1年堀りと2年堀りがある。最も一般的な栽培である。

2 適応地域

全域

3 栽培条件

(1) 温度

生育適温は18～22℃。気温12℃以上で球根が肥大する。低温にも比較的強い。30℃以上になると生育は停滞し休眠する。

(2) 土壌条件

耐病性が強く、肥料の吸収も強い。砂質土から粘質土壌まで栽培できるが球の色沢、しまりは砂質土が優れ粘質土では球が丸くなる。

「玉ラッキョウ」

分球は20球以上になり、球は小さい。首しまり加工歩合が高く、肉質はやわらかく臭気が少ない。小粒を目的にする花ラッキョウ栽培に向く。

2 栽培

(1) 圃場の選定

圃場は深耕する。通気性を好むため、水はけの悪い圃場では畝立てするか、排水溝などをつくって排水対策を行う。堆肥の施用は乾燥防止や肥料の保持に効果が高いが、ネダニの発生が多い圃場では施用しないほうがよい。

(2) 種球の準備

種球の多いものほど分球数が多いので分球芽を多く含む大球を用いる。首がしまって弾力性があり、充実している種球を選ぶ。

種球の10a当たり必要量は「らくだ」は350～400kg、「玉ラッキョウ」は250～300kgである。

ネダニ、軟腐病を予防するため、種球の消毒を行う。

栽培技術

1 品種と特性

「らくだ」

(3) 施肥量

	(kg/10a)		
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O
基肥	10	10	10
追肥	8	8	8
全量	18	18	18

(4) 栽植密度

条間25～30 cm、株間10～15 cm、10 a 当たり33,000株程度を基準にする。

(5) 植えつけ

8月下旬から9月中旬にかけて植えつける。深さ10 cm位の植え溝を切り、所定の株間に1球ずつ植え溝に挿し込む。浅植えは分球が多く、球が丸みを帯びた小球となり収量が少なくなるとともに、肥大にともない開張し、緑化球を生じ品質が低下する。

(6) 追肥

栽培期間が長期にわたるため、生育に合わせた追肥が必要となる。追肥は3回に分け、第1回は前期分球期の10月に、第2回は分球芽形成期の11月に、第3回は春期の分球肥大が始まる2月下旬に施用する。

(7) 中耕、土寄せ

追肥にあわせ中耕を行い、4月上旬球が露出し、緑化による品質低下を防ぐため土寄せをする。

3 収穫

葉先が枯れ始め、休眠に入ろうとする5月中旬から6月に収穫する。

掘取ったラッキョウは、長時間日光に当たると緑化したり腐敗しやすいため、できるだけその日のうちに畑で表面を乾燥させ、蒸れないように日陰に置く。